

## 日本進化思想史

著者	横山 利明
号	28
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第299号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00120431">http://hdl.handle.net/10097/00120431</a>

学位論文の要旨（2000字以内）

学位論文は400字原稿で1900枚あります。単行書で（一）（二）（三）（四）巻あります。各巻の編、章、節だけ拾ったところ4000字になり、制限を超えてしまいます。そこで編と章のタイトルだけ挙げて要旨といたします。

第一巻 『日本進化思想史』一明治時代の進化思想(一)

第一部

第一章 エドワード・モース

第二章 アメリカの師範学校留学生一伊沢修二 高嶺秀夫 高津専三郎

第三章 丘浅次郎の『進化論講話』

第二部

第一章 フェノロサと有賀長雄

第二章 有賀長雄の進化論

第三章 加藤弘之と『人権新説』論争

第四章 慶応義塾系の進化思想研究

第五章 社会人類学の進化論研究

第三部

第一章 北一輝の進化思想

第二章 平民新聞社中の進化思想観

第三章 大杉栄

第二巻 『日本進化思想史』一人間を探し求めた人々の記録(二)

第一章 大正時代の進化思想

第二章 社会主義者の見た進化思想

補遺 科学史学会の創立とダーウィン全集の刊行

第三巻 『日本進化思想史』一生物統計学への道(三)

第一編 1900年ごろの細胞生理学

第一章 中等学校の植物学動物学の教科書

第二章 遺伝学教科書

第三章 1870年～1900年の細胞生理学の様子

第二編 統計学の歴史

第一章 ラプラスの『天体力学』

第二章 ラプラスの『確率の哲学試論』

第三章 ケトレーの統計学

第四章 ガウスの法則 正規分布

第三編 数理生物学（記述統計学）の完成

第一章 ゴールトンの仕事

第二章 ピアソンの仕事（1）

第三章 ピアソンの仕事（2）

第四章 ピアソンの仕事（3）

第五章 ピアソンの仕事（4）

第六章 ピアソンの仕事（5） 総括

第四巻 『日本進化思想史』—メンデル遺伝学の成立と発展(四)

第一編 帝国主義

第一章 帝国主義時代のダーウィンの使われ方

第二章 哲学者のみた進化論

第二編 メンデル遺伝学の成立と発展

第一章 篠遠喜人のメンデル研究

第二章 外山亀太郎の蚕の遺伝研究

第三章 ベートソンと『メンデルの遺伝原理』

第四章 ヨハンセンの純系説

第五章 ドフリースの突然変異論

第六章 池野成一郎の『ローマ字実験遺伝学』とその他

第七章 木原均のコムギの遺伝学

## 論文審査結果の要旨および担当者

提出者	横山 利明
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤 弘夫 教授 小野 善彦 教授 有光 秀行
論文名	日本進化思想史
<p>本論文は「日本進化思想史」(一) から同 (四) に至る 4 冊の単行本から構成されている。</p> <p>明治時代における進化思想の受容を取り上げた (一) は、3 部 1 1 章からなり、その第一部では、日本への進化思想の移入の経路として、東京大学に招聘されたエドワード・モースとアーネスト・フェノロサ、明治 8 年にアメリカの師範学校調査のために留学した伊沢修二らなど、多様なルートがあったこと、進化論の普及に大きな役割を果たしたものに丘浅次郎の『進化論講話』があったこと、が論じられる。第二部では、進化論を独自に展開していった人物として、フェノロサの弟子の有賀長雄、政治学者の加藤弘之、慶應義塾グループの高橋義雄らに光をあて、その思想の分析を行っている。第三部では平民社を中心とした社会主義運動と進化思想との結びつきを論じ、また社会主義の影響を受けた北一輝や大杉栄が進化論をその思想の核心部分に受容していたことが指摘される。</p> <p>(二) は 2 章からなり、大正時代における進化思想の展開が論じられる。第一章「大正時代の進化思想」は、大隈重信を会長とする大日本文明協会から刊行された出版物の中に、遺伝学者のダヴェンポート、トムソン、コンクリンらの進化論に関わる多くの著作が含まれていたことと、それが及ぼした影響について論じる。また、大正期に流行する「生命論」との関係射程に収めつつ、土田杏村・室伏高信・田中王堂らの著作の中に進化思想の痕跡を辿っている。第二章「社会主義者のみだ進化思想」は、河上肇、賀川豊彦、平林初之輔、山本宣治らを取り上げ、社会主義者に受容され再解釈された進化思想について論じる。また、東大新人会と進化論との関わりについて考察する。</p> <p>3 編からなる (三) では、第一編において明治末から大正期の中学校教科書に、進化論と遺伝学がどのように取り上げられていたかを論じ、第二・第三編では遺伝研究の進展に伴って統計学が生物学にどのように取り入れられ、生物統計学の体系が構築されていったかを考察する。</p> <p>2 編からなる (四) では、第一編において、帝国主義の時代において進化論が人種差別と植民地支配の論理として機能したことを指摘し、第二編では篠遠喜人・外山亀太郎らの事績に着目して、メンデルの法則発見後の日本における遺伝学研究の足跡を辿っている。</p> <p>本論文は、欧米の進化論がいかなる経路をとって日本に受容され、学界、思想界、社会運動など多様な分野にどのような影響を与えていったかを、膨大な事例をあげつつ詳細に論じたものである。日本における進化論受容の様相を通史的かつ包括的に論じた研究は前例がなく、その成果は斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士 (文学) の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	